

蔑視への眼差し、抵抗

—佐藤泰志『そのみにて光輝く』論—

*小田島 本有

Motoari ODAJIMA

A look or resistance to contempt

—A study of Sato Yasushi's *Sokonimi nite hikari kagayaku*—

一 映画と原作との違い

『そのみにて光輝く』は第一部「そのみにて光輝く」、第二部「滴る陽のしずくにも」の二部構成となっているが、最初からこのような形だったのではない。第一部は一九八五年十一月『文藝』に発表され、一九八九年二月に河出書房新社から単行本が刊行されるに際し、第二部が書き下ろしとして加えられた。

佐藤泰志の評伝を書くため取材を続けている毎日新聞記者・中澤雄大は、「死んで花実が咲いた人・作家と家族の物語」の中で、『そのみにて光輝く』を「八五年に第一部を発表してから四年。〈何とか載せてもらえませんか〉と、泰志は当時の『文藝』編集長、高木有（たもつ）に手紙で訴え、ようやく日の目を見た思い入れの強い作品である」と説明している（福間健二監修『佐藤泰志・生の輝きを求めつづけた作家』、河出書房新社、二〇一四・二）。

単行本刊行から二十五年経過した二〇一四年四月、この作品は映画化された。監督は呉美保、主演は綾野剛、池脇千鶴、菅田将暉と豪華な顔ぶれである。

原作と映画はさまざまな点で違いがあった。

第一は原作で截然と区別されていたはずの第一部と第二部が映画では混然とした設定やストーリーとなった点である。

第二に、原作では造船所に勤めていたはずの達夫が映画の中では山での採掘をかつて行っていたことになっていた。その採掘中の発破作業の中で同僚が事故死してしまい、それがトラウマとなって達夫は仕事を辞めていた。原作では第二部

で登場するはずの松本が達夫の元上司として設定されており、松本はしばしば達夫のもとを訪れ、仕事に復帰するよう促していた。

三点目は原作の中では千夏の元夫となっていた中島の設定である。映画の中では中島は妻子ある身であり、千夏と長い間不倫関係が続いていた。千夏は彼との関係を「腐れ縁」と言っており、もはや彼との縁を切るうとしているが一方の中島は千夏に対する執着があり、絶えず彼女に付き纏っていた。

そして最も重視したい四点目は、拓児が起こした刺傷事件である。原作の中で拓児が刺した相手はかつて千夏が勤めていたキャバレーで呼び込みをしていた男であった。ところが映画の中で彼が刺した相手は他ならぬ中島である。千夏は中島と別れようとするがそれを認めようとしないうちに中島は彼女に対して暴行に及ぶ。それを知った拓児が逆上するという設定になっていた。

以上のように、原作と映画の間には大きな違いがある。文学作品を映像化する場合にさまざまな変更が加えられることはしばしばあることで、そのことじたいはさして驚くことではない。ただ、『そのみにて光輝く』の映画化に際して私が唯一不満を覚えたのは、原作において濃厚に打ち出されていた差別や蔑視の問題が映画では薄められてしまったことである。千夏・拓児姉弟が住むのは通称「サムライ部落」と呼ばれる被差別地域であり、千夏は家計を支えるためとはいいながら身体を売る仕事をしていた。都市化に伴いかつての小砂丘もなくなり宅地化

されて高層住宅が建てられたものの、千夏・拓児の家だけはそちらに移り住むことをせず、完全に孤立した状態に置かれていた。拓児が犯した刺傷事件もこのような背景があつて起きたものだった。ところが、映画では拓児の反抗は中島個人に対する個人的な憎しみに矮小化されている。原作では重要な意味を持っていたはずの差別、蔑視の問題が殆ど素通りされてしまった。それは本来であれば佐藤泰志にとって要となるはずのものではなかったか。

二 『海炭市叙景』で描かれた差別・蔑視

『海炭市叙景』はもともと加藤健次編集の雑誌『防虫ダンス』に一九八八年一月から連載されていたが、その連作を佐藤が打ち切り、雑誌『すばる』で同年十一月から新たに最初から断続的に掲載を始めるという複雑な経緯を辿っている。

『海炭市叙景』は「海炭市」という架空の都市に住む人々の姿がオムニバス形式で書き上げられた小説であった。この作品は二部構成となっており、それぞれ九編ずつの短編、全部で十八編で成立している。海炭市は「海」すなわち造船業と、「炭」すなわち炭鉱業を基幹産業とする街であるが、個々の作品に登場する人々は互いに密接な関係を持たず、作品全体としてのまとまったストーリーがあるわけでもない。だが、作品全体を通して、この海炭市がこれら互いに〈無縁〉な人々によって構成されていることが浮かび上がってくる。さらには、彼らが何らかの形で繋がっていることを暗示しているところにこの作品の特質があつた（拙稿「佐藤泰志『海炭市叙景』論——〈無縁〉の集合体——」、『釧路工業高等専門学校紀要』第五十一号、二〇一八・一）。

『海炭市叙景』で注目されるのは、佐藤がしばしば差別や蔑視の問題を書き入っていた点であり、いずれも第一章にそれが見られる。

「4 裂けた爪」では主人公の晴夫が幼い頃から被差別地域の存在を父親から教えられ、そこに近づくかぬよう言われていたことが語られている。「8 はだし」では、閉店間際に入ってきた泥酔客がいわゆる「浜言葉」を使っていた。女従業員は彼を邪険に扱うのだが、それはただ単に閉店間際だったからというだけでなく、客の素性が「浜言葉」から分かったことも幾分影響したものと考えられる。少なくとも、彼は自分が蔑視されたと思ひ、さかんに毒づいていた。

そして何より象徴的なのは「7 週末」である。ここでは長年にわたって路面

電車の運転手を務め、表彰もされたことのある達一郎が主人公である。この日の彼は娘の出産の知らせを心待ちにしながら運転をしている。彼は娘の敏子から結婚したいと打ち明けられたが、その相手が元スラム街の小砂丘出身者であつた。いわゆる被差別地域であり、達一郎もその認識はあつたし、妻はその結婚に対して頑強に反対した。達一郎はその青年と直接会う。その青年の父親はリヤカーを引いて商売をしていたが、彼は父親がこの街を隈なく知り尽くしていることを誇らしく語っていた。自らの出自に対して臆する様子もない。この姿を見た達一郎は妻の反対を押し切り娘の結婚を認めた。そして時間が過ぎ、今ではその妻もこの青年に対して不満は持っていないことが語られている。

達一郎や彼の妻は、もともとは元スラム街の出身者を差別する側の人間であつた。しかし、娘の結婚を契機にその認識を変えていった。人間の認識や価値観というものはそう簡単に変わるものではない。しかし、このようなエピソードを挿入することで、人間の認識や価値観が変わる可能性を示唆したところに、この作品を書いた作者のひそかな願いが込められていたと言えよう。

三 付き纏う過去

作者が『そのみにて光輝く』を単行本化することに強いこだわりを持ち、その際には第二部にあたる「滴る陽のしずくにも」が書き下ろしとして追加されたことについては先述した。

第二部は達夫と千夏が結婚し、二人の間には娘のナオもいることから第一部の頃からは数年が経過していることが分かる。千夏は商売とはすっかり縁を切り、すっかり主婦として収まっている。この変貌ぶりは彼女の母親ばかりか弟の拓児も驚きを隠せないし、達夫に感謝すらしている。達夫と千夏は平凡ながらも幸せな結婚生活を営んでおり、当人たちはそのことに満足もしていた。千夏は過去とはすっぱり縁を切っていたつもりだった。だが、過去は彼女に付き纏ってきた。なぜなら、彼女の過去の商売について蒸し返す人間がいたからである。そのことは二人の間に生まれたナオの出生に疑いが向けられるという形で現れた。拓児はナオを溺愛していた。それだけに拓児にとって疑いの目を向けられるということが我慢ならなかったのである。日頃周囲から蔑視を受けていたことを痛感していた彼は、この時も同様のものを感じ取ったのだ。

佐藤は確かに『そこにみにて光輝く』の第一部において千夏・拓児を被差別者として描き、その問題を描いていた。その後『海炭市叙景』を書き、差別・蔑視の現実を乗り越える可能性を期待も込めて示唆していた。だが、『そこにみにて光輝く』の第二部では、差別・蔑視の厳しい現実を描き出した。拓児の犯行はそれらが背景にある。そして佐藤が第二部の中で一番書きたかったものがこれだった。映画の中ではそれらが殆ど霧消してしまい、拓児の犯行は中島という個人に対する憎悪に矮小化されてしまった。この作品の中で柱となるべきものが映画の中で骨抜きにされてしまったのである。

四 拓児と達夫

達夫はパチンコ屋で拓児と会った。そのきっかけは、拓児が「火を貸してくれ」と達夫に話しかけたことである。いちいち火を貸すのは面倒と思った達夫は景品引換所で百円ライターと交換し、それを拓児に渡した。達夫にしてみれば拓児に對して特別なことをしてあげたという自覚はない。しかし、作品を読む限り、拓児はこの一件を非常に有り難く受け止めていることが分かる。

「町の人間が敵なら俺もだろう。なぜメシに誘った」

食堂でひとりで済ませてもよかったのだ。

「おまえは違う」

「俺も町の人間だ」

「違う。ライターをくれた」

達夫が自らを「町の人間」と言う時、それは自分が「差別する側」であることを含意している。だが、拓児は達夫がライターをくれたことで彼を「町の人間」として一括りすることをしない。彼は達夫を千夏に紹介する時も、「いい奴なんだ。俺にライターをくれた」と言っている。こればかりではない。拓児は自分が育てていた「ミネゾウ」（本当の名はミネズオウ）という植物を渡す際にも「ライターのお返しだ」と語っているし、このとき拓児は「生真面目な眼」になって「忘れない」という言葉を添えている。

拓児がこれほどまでにライターの一件にこだわるのはなぜなのか。ライターを

与えるという、達夫にとってごく些細な行為が拓児にとって極めて有り難いものに思えたということだ。つまり、ここから伺えるのは、それまでの拓児には自分をまともに相手にしてくれる人間が皆無に等しかったという事実である。「サムライ部落」という被差別地域に生まれ育った拓児にとって、差別され蔑視されるのがいわば当たり前であり、その中であつて達夫は対等に自分に向き合ってくれた例外的な人間だったのだ。だが、その拓児も祭りの時だけは町の人間と一緒に興じるという側面も合わせ持っていた。これが拓児の憎めないところでもある。

当初、達夫は拓児にライターを渡した事実を後悔すらしていた。「あんなことはすべきではなかった。だがもう遅い」という記述がそのことを端的に示している。拓児はメシを食わせるといって、彼を自宅に招いた。都市開発に伴い、近くに建てられた高層住宅に他の家々は移り住んだが、この家だけが一軒だけ残っていた。かつて「サムライ部落」と言われ、達夫が子どもの頃は近づきもしなかった地域である。

家に連れて行かれると、そこに現れたのが拓児の姉千夏だった。彼女は黒いスリッパ姿で現れ、あくびを噛み殺していた。実に無防備な姿で彼女は達夫の前に現れたことになる。千夏はそのままの姿でチャーハンを作り始めるが、拓児はそのとき達夫に向かって「いい女だろ」と言う。この後、拓児が寝たきりの父親について、「メシも食うし、あっちのほうだつて達者なものだ」と言ったとき、「拓児」と語気を強めて睨んだ千夏の姿をみて、達夫はそこに「女」を感じている。後に彼が千夏を海水浴に誘うようになり、「この家族に深入りする自分が手に取るようにわかった」となるきっかけはこの時生まれたと言えよう。この時点で達夫にはまだ拓児およびこの家に対して警戒感があった。

その一つは、この大城家がかつて「サムライ部落」と言われた地域の住人だったこと。都市開発に伴って道路を隔てた反対側には六棟の高層住宅が建てられ、住民は立ち退きを余儀なくされたものの、この一軒のバラックだけが残されていた。そこには、町の人間たちと同化したくはないという、この大城家の強固な意志を認めることができる。

そしてこの警戒感には拓児も関わっていた。当初達夫は拓児に対して「深入りしたら危うい男」として捉えていた。拓児に伴われて大城家を訪れたとき、母親が「刑務所の友達を連れて来たのか」と尋ねたように、彼には刑務所入りの前科

があつた。だが、ライターをもらったことを殊更喜び家にまで招くという姿を見て、その評価は「単純な男」「憎めない奴」とほどなくして変わっている。

当初抱いていた警戒感がなくなっていく、千夏や拓児と深く関わっていく過程を描いたのが『そのみにて光輝く』という小説でもあつたのだ。

五 達夫と千夏

達夫と千夏は当初から惹かれ合つていたと言えよう。達夫が弟を睨む姿に「女」を感じたことは先述したが、千夏は達夫の年齢を聞いたあとで、すかさず「奥さんは」と尋ねている。彼が独身か妻帯者かを確認しているのである。「あんたみたいな男前なら、奥さんがいてもいいのにね」という言葉からも、千夏には当初から達夫に対する関心が芽生えていたことが伺える。

家を出た達夫を彼女が追いかけてきた場面はその点で象徴的である。彼女は「家族のことを悪く思われるのが嫌なの」と追いかけてきた理由を語る。確かにそれはなかつたわけではない。しかし、達夫に惹かれる気持ちがあればこのような行動は敢えて起こさなかつたはずだ。周囲は拓児を「ただの乱暴者」だと思つている。だが、拓児は「優しい子」なのだ、と彼女は達夫に訴える。弟が達夫を「友達」と思っているからには、よけい達夫には拓児を理解してもらいたかつたのだろう。

後日二人が海水浴に訪れたとき、千夏は拓児の前科について具体的な話をした。それによると、彼は「サムライ部落の子は大殺し」と言われて逆上し、その見知らぬ男を刺したとのことであつた。ここにも差別、蔑視の問題が横たわつている。千夏はそういう拓児を「弱い性格」と評している。この評し方に千夏の強さが見て取れる。いくら蔑まれても動じない。いちいち腹を立てて反発したりしたらそれこそこちらの負けになる。それが千夏の強さだつたのだ。

達夫も最初から千夏には惹かれていた。不意に千夏の姿が心に食い込み、それが始末に負えない。そのため夜になつたら繁華街で身体を売る女たちの物色を考えたりもする。千夏は家計を支える必要性もあつて、身体を売ることをしていた女性だつた。したがって、千夏の店を訪れ彼女を性的欲望の対象として扱うことは可能だつたはずである。そうなれば、二人は〈客〉と〈店の女〉という関係になる。

しかし、達夫はそうしなかつた。彼は大城家を訪れ、拓児に姉を呼び出してもらうよう依頼する。千夏はまだ寝ていたが、拓児の言葉によると、「千夏、あわてて起きたぞ。小娘みたいだ」ということだつた。この一件からでも、千夏も達夫に対して関心を抱いていたことは明らかだ。達夫は拓児の見ている前で、千夏に「誘いに来た」とストレートに言つている。この言葉が二人だけの場面ではなく拓児という第三者の前で発せられていることは重要だ。このとき達夫は千夏との関係を公然としたものにしたという願望が芽生えていた。達夫が千夏の手を強引に取り、厭がる千夏の姿を目の当たりにした拓児が、「夫婦だな、まるで」と冷やかしかつて語っているのが印象深い。

いずれにせよ、これらのことから達夫は千夏をたんなる性的対象として割り切ることをせず、まさに生身の女性としてまるごと受け止めることをこのとき心に決めたのだつた。

六 達夫が結婚を決意すること

達夫は二十九歳として設定されており、両親は既に亡くなつてゐる。下に妹がいるが彼女は結婚して本州に住んでいる。「海峽を連絡船で隔てた土地」と書かれているのでおそらく青森あたりなのである。妹は保険会社に入社し、社内結婚をした（第二部では夫の転勤に伴い妹は岡山に移り住んでいた）。

この妹はしばしば達夫に手紙を寄越していた。彼女には懸念材料が少なくとも二つあつた。一つは両親の墓の問題、もう一つは兄の結婚問題である。彼女は両親の墓を海峽に臨んだ、街全体が俯瞰できる共同墓地に立てたがっていた。しかし、達夫が何の関心も示さないことに焦燥感が募る。そして、兄が未だに独身であることに我慢がならず、たびたび見合い話を持ちかけていた。しかし、達夫はその気になれない。

達夫は造船会社に就職していた。だが会社が人員整理を行うに至り、組合はストライキを起こしたが、達夫はその運動からも距離を置いていた。退職後もかつての同僚だつた組合員から何かと協力を求められても同意しないことから、その運動そのものに違和感を覚えていたのであろう。そして、退職金のこともあるから三十歳までは待てという忠告があつたにもかかわらず、彼はその前に自ら会社を辞した。結局、彼の退職から十日後、ストライキは解除され、人員整理が行

われた。このときの達夫の選択が果たして賢明だったのかどうか、断定的なことは言えない。だが、彼の心はすつきりしていたわけでもなく、仕事を辞めたからといって次の方向性が見出せていたわけではなかった。ただいたずらにパチンコ屋で時間を潰すだけの日々が続いたのであり、拓児と出会ったのはちょうどそのような矢先だったのである。

達夫が千夏と出会い、彼女との結婚を真剣に考えるようになったのは、彼女がふと漏らした言葉がきっかけになっている。二人が海水浴に出かけたときの会話である。

「何を考えているの」

千夏が手を伸ばし、ついでおおおと顔を胸に押しつけて来た。あの家を出たい、とささやいた。そのためなら何をしてもいい、と。

「どこへ行く？」

達夫は首をあげ、千夏を見た。千夏はおそろしく真剣な、ほとんど怒ったような眼をしていた。

思わず漏らした言葉だったが、このとき千夏の眼は真剣である。

この言葉の背景にはさまざまな事情が複雑に絡み合っていた。

一つ目は一家の貧しい生活である。このため千夏が身体を売りながらも生計を支える必要があった。拓児は定職を持っていない。

二つ目は脳軟化症の父親の存在である。寝たきりの状態にありながらも、この父親は性欲だけは衰えない。その相手を母親が務めるのだが、場合によつてはその相手を千夏がすることもあった。まさに地獄絵図である。

いったん決心した以上、達夫は結婚に対して真剣だった。一方の千夏は真剣に取り合おうとしない。「馬鹿馬鹿しい。あんた真面目なの」という千夏の言葉は、二人の置かれた境遇の違いを考えれば無理もないことだった。二人は既に肉体関係をもっていたが、千夏にはそれだけで充分だったのである。

いざ結婚しようとしても、達夫には乗り越えなければならぬハードルがいくつも待ち構えていた。

まずは、いつも見合い話を持ちかけていた妹の存在である。達夫は手紙で千夏
の存在を伝えた。第二部では妹が最初千夏を拒んでいたことが語られている。だ

が、妹から持ちかけられた見合いの話を達夫は断わる手紙を出した。その後、父親の納骨のため訪れた妹は千夏に会い、初めて二人を認めた。このとき千夏は妊娠中であり、妹もそのことに気づいたのだろう。別れ際、妹は千夏に、「機会があったらぜひ遊びに来てね」「兄さんは変り者だけど仲良くやってちょうだい」と言っている。

ちなみに単行本『そのみにて光輝く』は、扉に「妹に」と書かれている。作中の達夫の妹を作者の妹と同一視することはできないだろうが、幾分かは反映されているのかもしれない。

二つ目は千夏の元夫であった中島の存在である。別れてからも中島は千夏と縊りを戻したがっていた。そのことを知る達夫は拓児に仲介の労をとってもらい、千夏とはきっぱり別れて欲しいと直談判する。その結果、達夫は中島から激しい暴行を受けるのだが、彼は決して抵抗しない。その姿を目の当たりにした拓児は「見直したよ」と言い、今まで「兄貴」として慕っていた中島とは縁を切ることを決意し、中島と共にやっていた「植木屋はやめだ」と宣言する。そして千夏に向かい、「姉ちゃん、夫婦になってしまえよ」と勧めるのである。血だらけになった達夫を目にして、千夏も達夫の本気度を知った。達夫は中島のもとをその後も三度訪れ、そのたびごとに殴られたり蹴られたりする。このことについて阿部公彦はこのように述べている（『佐藤泰志の主人公たちが痛い目に合うわけ』、福岡健二監修『佐藤泰志―生の輝きを求めつづけた作家』、河出書房新社、二〇一四・二）。

ここに描かれた主人公にはほとんどファンタジックと言ってもいいようなヒロイズムがある。反撃しようと思えばできる。抵抗したり、逃げることもできる。でも、わざわざ「残念だけど、俺もそうまともじゃなくてね」などという台詞を発して相手を挑発し、殴られてもされるがまま。そうすることで彼は何らかの禊ぎを果たそうとするかに見える。おそらく千夏に、彼女が今までの世界と縁を切らせるために、達夫はあえて血を流しているのだ。

確かに「残念だけど、俺もそうまともじゃなくてね」という言葉は中島の暴力を誘発する意図的なものだったと言えよう。阿部が指摘するように、そこにヒロイズムを認めることも可能である。明らかに達夫は自らの言動で中島を挑発し、

自ら受苦を求めた。そこには悲惨としか言いようのない千夏のそれまでの人生を自分なりに受け止めたいという気持ちも潜んでいたはずである。それを阿部の言うように「禊ぎ」と捉えることも間違ではない。

達夫は決して抵抗しなかった。そして彼はそのことで精神的に中島に対して優位になるのである。殴ったり蹴ったりする中島は相対的に貶められ、みじめになる構図がそこにあったと言えよう。そして達夫が五回目に訪れたとき、さすがに中島もあきれ果て、《しごとい奴》である達夫に根負けしたのであった。その間、千夏も中島を決して恐れることはなかった。その点で彼女も根性の坐った女だったのである。

結婚するに際し、達夫は千夏に「水商売はやめろ」と言い、千夏はそれに従った。それは一連の出来事を通して彼女が達夫の真剣さを目の当たりにしたからに他ならない。そして第二部を読むと、千夏はすっかり変貌したことが語られている。拓児は「すっかり主婦になってしまったな。あんなふうになるとは想像もできなかったよ」と、達夫に語っている。この思いは千夏・拓児の母親も同様だった。この変貌ぶりに千夏の決意のほどが伺える。このような変貌ぶりは熊谷達也『邂逅の森』でもかつて遊郭で働いていたイクが富治の妻になって激的に変化した姿と酷似している。

そして最後には生活の問題があった。結婚を決意した時点で、達夫は失業状態に置かれていた。彼が千夏と結婚するには、彼女を養っていくための仕事を探さなくてはならない。しかも、彼が結婚によって引き受けるのは千夏だけではない。大城家には脳軟化症の父親、母親、それに定職に就いていない拓児がいた。結婚するということは、これらすべてを受け入れる覚悟を必要とする。しかも、千夏には商売をやめるよう言い渡したからには、彼が率先して稼がなければならなかった。彼が水産加工場に勤務したのはそのためである。しかし、その職場で彼の心が満たされていたわけではない。第二部で知り合った松本が、「あんたは満たされていないだろう」と指摘したのは当たっていた。その彼が松本の採掘の仕事に引き寄せられていくのは、いわば自然の流れだったのである。

七 達夫と松本

達夫と松本を引き合わせた仲介役は拓児であった。たまたまサウナで拓児と松

本は出会ったのだが、この時の模様を松本は達夫にこう語っている。

「あそこで、拓児とどうやって知りあったんだ」

「なに、椅子で寝て、朝起きたらあいつがいた。だし抜けに、あんた宿無しかと話しかけてきたよ。で、適当にあいづちを打ったわけさ。その場はそれで終わったし、別段、俺も気にとめもしなかった」

サングラスの向うのつぶれていない眼と唇で思い出すように笑った。ウェイターがビールとジンを運んで来た。

「俺が身繕いして外へ出ると、なんとあいつが向い側のビルのシャッターの前にしゃがんでいた。霧雨が降っていて、庇で雨をさけながらね。野良犬みたいな野郎だと思った。俺を見て無邪気に笑うんだ」

ビールを飲みながら松本が話を続けた。

「それで俺は道を横切つて拓児の所へ行くと、並んでしゃがんだ。しばらくふたりでそうやって黙って煙草を吸った。おかしな男だ。何となく無視してしまえない気持ちにさせるんだ」

最初に拓児と口を利いた時、俺もそうだった、と達夫は思った。思いながら、朝の小雨の中、ビルのシャッターのまえでしゃがみ、言葉もかわさず煙草を吸っている大の男ふたりを想像した。いい光景だった。

「吸殻を舗道に弾き飛ばすと、拓児は立ちあがって、映画に行こうと誘うんだ。よせよ、って俺が答えると、心配するな、東京からの出稼ぎで戻ったばかりだから金ならある、とこんな調子だ。ひさしぶりに俺は大笑いした。断れるか」

首を振った。

「そうだろ。あんたの義弟はいい男だ」

引用が長くなったが、このエピソードを通じて松本と達夫の距離が一気に縮まっているのが分かる。それは、人懐こさを持った拓児と出会い、いつしか彼と関わってしまうというプロセスがこの二人の共通体験だったからである。

松本は当初、拓児を「野良犬みたいな男」「おかしな男」と感じた。だが、無視できない。無理やり映画に誘われ、いったんは断ると拓児は自分が金を出すから「心配するな」という。松本に金がないと思ひ込んだのだろうか。松本として

は苦笑するしかない。このようにして松本は拓児のペースに引きずられたのである。それは達夫も共有していた体験だった。そして松本は拓児について、「あなたの義弟はいい男だ」と語る。『そのみにて光輝く』において、達夫は第一部では千夏、第二部では松本という、彼の人生を左右する人物と出会うが、いずれもその仲介役は拓児であった。

自動車が欲しいと思っていた矢先、達夫は拓児から中古車を売りたいと思っている男がいるという話を聞いた。それが松本だったのである。

達夫と松本はその出会いから本質的に繋がっている印象がある。松本は鉱山開発を手がける男であり、その話に先に夢中になったのは拓児の方だった。松本はサングラスをかけている。発破作業で目をやられたためだった。この仕事はそのような危険も伴っていた。

達夫は出会い当初から松本に惹かれるものを持っていた。そして彼が大胆さと共に慎重さも持ち合わせていることも評価している。家にきた松本からの電話を達夫に取り次ぎ、その様子を見ていた千夏は、「ずい分、気心の知れているような話し方ね」と言う。早い時期から夫と松本の親密さを察知していたのである。松本は中古車を売りに来た時、その後なかなかエンジンがうまくかからない時でも家を訪れていたのです。千夏も松本に会っていた。千夏も松本には一定の信頼を寄せていた。達夫が拓児を伴い松本の元で働くことを決めたことを伝えた時、千夏は「松本って人が最初に来た時から、こうなると思っていたわ。でも、少なくともあの人は信用できそうね」と言っている。彼女も達夫が山に行く決心を固めてから生き生きしていたことも感じていたのである。それでも、「男は馬鹿ね。こんなふうに殴りあって、勝ったとか敗けたとか騒いでみたり、くだらない夢にとりつかれたり」と、生活者の立場から男を対象化する視点も持ち合わせていた。松本は鉱山に行くに際し、達夫に対して二つの要望を出していた。一つは社員になって欲しいということ。そうなれば冬場にも給料が出せるからである。そしてもう一つは、冬場の間に火薬の取り扱いなど、幾つかの免許を取ってもらいたいということであった。これからのことから松本の真剣さが分かるし、彼が何よりも達夫のことを考えてくれていることが明らかである。

鉱山行きはもう一步のところまで来ていた。そこで起きたのが拓児の刺傷事件だったのである。

階段をあがる途中で、面会には行くのだろうか、と松本がきいた。

「勿論だ」

「待っている、と伝えてくれ。あんたとの約束は守る」

「それを聞いたら喜ぶだろう」

この会話だけでも松本の人間性が浮き彫りにされている。もともと鉱山行きに強い興味を示したのは拓児だった。松本はもともと達夫と共に仕事をする意欲を示していたが、拓児も一緒に連れていきたいという達夫の要求を受け入れ、そのことを約束した経緯がある。いったん交わした約束は必ず守る、それが松本だった。

そして、事件後の拓児への対応からも松本の人間性を伺うことができよう。彼は人間を一面的に判断することをしない。ある人間が犯罪を犯した場合、たいていの人は「犯罪者」「厄介者（悪者）」というレッテル貼りをしがちである。少なくとも松本はそのような捉え方をしなかった。収監の身となる拓児にとって、松本からの伝言はどれほど心の支えとなることか。

八 拓児という男

最後に大城拓児とはどのような男であったのかについて考えてみたい。

作品の中ではいかにも拓児らしさを示すエピソードが書かれている。それは高山植物に対する態度からも伺える。高山植物をこっそり盗み、それで商売をするというのは〈兄貴〉こと中島から示唆されたことであった。だが、拓児は商売を度外視して高山植物を育てることに熱意を注いだのである。達夫の回想の中にも、「だが、確かに知りあったばかりのあの頃、拓児はそうだった。商売を度外視していた。根づかせるために、骨を折り、丹精をこめていた。それが拓児だったし拓児の中の陽のあたる部分だった」というのがある。熱意を傾けられる対象を見つければ、彼はひたすらそこに時間をかけて打ち込むことができるのだ。

また、彼は姉思いの人間としても描かれている。

日頃の彼は、姉の姿をみては「千夏、いい身体をしているな」、千夏が達夫に腕を絡ませた時は「千夏、調子がいいぞ」など、しばしば姉をからかったり、憎まれ口をきいたりしている。生意気な弟と言ってよい。

しかし、その一方で彼の姉に対する思いも作者は丹念に書き込んでいた。千夏との問題を解決するために達夫が中島と会いたいと申し出た時、彼は「男の味方はどっちもできない。でも、姉ちゃんの味方ならする。本当に兄貴と会うか」と述べているし、それに加え、「姉ちゃんを泣かすな。遊びなら遊びでいいんだ。姉ちゃんも、そのぐらい心得てる」と、姉の側に立った発言をしている。

達夫が千夏の着ている花柄のブラウスを「似合うな、それ」と誉める場面がある。その時、千夏は「そう。拓児が買ってくれたのよ」と答えている。

さらに達夫と千夏が入籍した時も、本人たちが納得しているにもかかわらず、「まともに結婚式をあげて貰いたい」と最後まで抵抗したのも拓児だった。おそらく前夫である中島とは式を挙げたことなどなかったのだろう。それだけに弟としては、姉に結婚式をさせたかったのだ。そして、彼は達夫に、「千夏を不幸にしたらただじゃすまさないぞ」とまで言っている。

このように拓児は姉思いの人間だった。だからこそあのような事件を引き起こさざるを得なかったのである。拓児の引き起こした刺傷事件は、背景に姉や姪ナオへの愛情があり、日頃自分に向けている蔑視に対する怒りが根底にあった。拓児はナオを溺愛していた。彼は日頃絶対に立ち寄ることすらない本屋を訪れ、ナオのために幼児雑誌を購入して彼女にプレゼントしている。

それだけに、かつて千夏が働いていたキャバレーで呼び込みをしていた男が、千夏が結婚し子供を産んだ事実を知って根拠のない放言をしたことが彼には到底許せなかったのである。

「そいつはな、千夏は男なら誰とでも金で寝る商売をやっていたんだ、誰の子供だか、わかったものじゃない。そういったんだぞ」

事件のあと、拓児は怒りを込めて達夫の前でこう発言している。興奮に掻き立てられた拓児は、怒りに任せて相手の男を殴り倒した。

拓児の怒りには二つの要素が混在している。一つは姉の千夏が蔑まれたこと、そしてもう一つは、自分が溺愛するナオの出生を汚されたことだった。拓児の怒りそのものは正当である。この一件を知らされた達夫は拓児に行動を自重するよう諭している。

ところが、運の悪いことに拓児は再びこの男と出会い、彼の左の二の腕を殺意

をもって刺した。死に至ることはなかったが、松本や達夫と共に山を訪れたいという拓児の夢は一瞬のうちに消え去った。

拓児の望み、それをこいつは自分で棒に振ってしまった。すくいかけた水を、全部指のあいだからこぼしてしまった。

この記述は啄木の歌を想起させる。

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指の間より落つ

言うまでもなく『一握の砂』（一九一〇・一二）に収められた代表作である。

「一握の砂」というタイトルの機縁ともなった歌だ。この歌は一九一〇年（明治四三年）十月の作品である。この年の五月、大逆事件が起きていた。幸徳秋水をはじめとする十二名が処刑されたのは翌年の一月のことである。函館は言うまでもなく啄木ゆかりの土地であり、ここで生まれ育った佐藤泰志にとって啄木のこの歌は殊更身近に感じられるものではなかったか。

達夫は刑務所で拓児に面会した時、欲しいものはないか尋ねる。その時、拓児から返ってきた答えは「ナオの写真を一枚くれないか、あとは何もいらぬ」だった。彼がいかに姪のナオを溺愛していたかがよく分かる。作品では書かれていないが、「待っている」という松本の伝言も達夫を通じて拓児に伝えられるだろう。拓児はこれらを大切にしながら獄中生活を迎えるはずである。

九 まとめ

『海炭市叙景』第一章の「7 週末」で達一郎の娘が結婚した相手は小砂丘出身者であり、いわゆる被差別者であった。この男は自分の父親がリヤカーを引いて商売をしているため、この街を隈なく知り尽くしていることを誇らしく語っていた。実は佐藤の両親もリヤカーを引いて商売をし、連絡船で函館と青森を往復する暮らしをしていた。そのことが作品の中に反映されているのは見やすい。娘

の結婚した相手が決して卑屈にならず、達一郎もその彼を見込んで結婚を認めたこと、そしてその決断に誤りはなかったことを語ることで、佐藤は差別・蔑視の問題を乗り越える可能性を語ったのである。だが、人々が暮らす以上、差別や蔑視はそう簡単になくなるものではない。その厳然とした事実を彼は『そのみにて光輝く』の第二部で書き込まずにはいられなかった。

彼が千夏や拓児と同じ出身者であったということではない。だが、彼がこの問題にこれほどこだわる理由は何なのか。確かに両親がリヤカーを引いていたという事実が彼に引け目を感じさせたということは考えられないわけではないが、それが主たる理由とは考えにくい。

『そのみにて光輝く』を書いていた頃、彼は既に何度も芥川賞候補としてノミネートされていた作家であった。何度も候補として名前が挙がりながら受賞できずに終わってしまうことが繰り返されたとき、彼は周囲の眼差しを痛く感じ取ったのではないか。そこにあつたのは冷やかな眼差しであつたかもしれないし、同情や憐れみであつたのかもしれない。いずれにせよ周囲からの眼差しを殊更感じる環境に置かれていたという事実が、『そのみにて光輝く』において差別や蔑視に拘る糸口を与えたのではないか。作品は拓児の犯行という後味の悪い結末となつたが、それでもなおかつその拓児を見捨てぬ人間がいることを示唆するこゝとで、この作品は明るい光を見せているとも言えるのである。